

文書等並べて辿る、家康、松平一族・家臣

徳川家康 75年の生涯 年表帖

下巻・前編

第3巻
(全4巻)



「秀吉の死」、慎重居士家康が策動。
好学の士・筆まめ家康が
大胆に天下を獲った！

目次

はじめに～この本の使い方～…………… 2

目次年表…………… 3～15

関ヶ原の戦い 城位置簡略図…………… 16～17

徳川家康75年の生涯年表帖(下巻・前編) …… 18～213

あとがき、奥付…………… 216

はじめに～この本の使い方～

この本は、「文禄・慶長の役」・「秀吉の死」・「関ヶ原の戦い」等から「江戸幕府を開く」までの家康中心の戦国期の年表で、日付までを記載しています。一部不明な月・日付に関しては、「―」で割愛をさせて頂いたり、「秋」「下旬中旬」などと、表記しておりますのでご了承下さい。

特に重要と思われる事項(歴史的流れのために必要と思われた事件等や家康文書などは、太字等で記載しております。

本体となる戦国年表はそこそこな分量となっております。目次年表は、圧縮しており、その項目の通しNoが記載されております。検索の一助として下さい。

～太陰暦・太陽暦について～

本書での月日の表記は全て和暦を採用しており、一部、西暦の表記とはズレが生じています。

日本では、明治5年12月3日(＝明治6年1月1日(西暦1872年1月1日))までは太陰暦(旧暦・天保暦)を、それ以降は太陽暦(新暦・グレゴリウス暦)を使用しています。

そのため、太陰暦である和暦(旧暦・天保暦)の月日と、それに対応する太陽暦である西暦(新暦・グレゴリウス暦)の月日は一致しません。ご注意下さい。

なお、太陰暦(太陰太陽暦)の1年は太陽暦の1年に比べて約11日短く、このズレは3年で約1月分(約33日)となります。

このため約3年に1度、余分な1ヶ月(閏月)を挿入して1年を13ヶ月とした閏年を設けることで、ズレを解消しています。

なお、閏月は閏●月と表記し、仮に閏4月があった場合、これは通常の4月の後に閏月(閏4月)が挿入されていることを示しています。

例)関ヶ原の戦い：慶長5年9月15日(西暦：1600年10月21日)

西暦 和暦	月日	出来事	No.
天正20 (文禄1) (1592)	10月27日	「徳川家康・前田利家連署状」。「一のとの国より筑前家中へ差遣候」。家康・利家、路次御奉行中に黒印状。	6378
	11月1日	母の葬儀等を終えた太閤秀吉、再び、肥前国名護屋城に到着する。	6380
文禄1 (1592)	12月8日	後陽成天皇即位のため、「文禄」に改元。	6388
	12月13日	徳川家康、信濃国与力の本曾義昌・小笠原秀政ら諸大名に、肥前名護屋出陣を命ず。	6391
文禄2 (1593)	2月12日	徳川家康、領国内の武將に命じて大船建造のため、鉄板を名護屋へ輸送させる。	6408
	5月15日	石田三成ら三奉行と小西行長ら、明使節の謝用梓・徐一貫と共に、肥前名護屋に到着。明の講和使節、名護屋に着くと、家康・前田利家の邸宅がその宿舍とされた。しかしこの明使節は宋応昌が幕下の策士を明皇帝から任命されていないのに「明使節」を詐称していた。	6422
	5月20日	羽柴江戸大納言徳川家康・大和中納言羽柴秀保・丹波中納言羽柴秀俊・岐阜中納言織田秀信・結城少将秀康ら20名連署誓紙を大明国勅使に与える。あくまでも本物の使節と考えた秀吉は、彼らを歓待したという。そしてこの日、名護屋在陣の大名・武將ら120人に対して、使節に無礼を働くことを禁じる誓約をさせた。	6423
	6月28日	「文禄の役」。太閤秀吉、石田三成・増田長盛・大谷吉継・小西行長を通じて大明国と日本国の和平の7ヶ条の「条々」を提出する。翌日、明使節は帰国に向けて発つ。	6431
	8月3日	「秀頼誕生」。淀殿(秀吉側室浅井茶々)、大坂城二之丸において男子(拾丸、後の秀頼)を出産。秀吉57歳の時の子で、子供の健康な成長を願う当時の祈願として、いったん捨てた形にして、家臣の松浦重政が拾い上げたという。	6437
	8月29日	家康、肥前国名護屋から大坂に着く。	6443
	閏9月13日	家康、自らの伏見邸に縄張りに向く。	6456
	閏9月20日	太閤秀吉、大坂城を明渡し、竣工した伏見新第(指月山城)へ正式に移徙。諸將、伏見近辺に第館を設け始める。	6460
	10月5日	太閤秀吉、禁裏に参内し、この日より3日間、後陽成天皇の前で能の会を催し、秀吉、細川忠興らと、舞台の橋掛かりを練り歩く。家康も「千手」を演能する。	6467
	10月26日	徳川家康、1年7ヶ月ぶりに江戸に帰城。	6475
	―	「御前講議のはじめ」。この年、徳川家康は肥前名護屋に赴き、小早川秀秋・家康に接した儒学者藤原惺窩を江戸に招いて「貞観政要」(政治のあり方を説き示した中国古典)を受講、治世を学ぶという。徳川時代の朱子学の開祖といわれる藤原惺窩が、朱子学を絶対視しなかったことが、徳川時代の思想全体の異端に対する寛容の態度を生み出したともいう。	6498

天正20 (文禄1)	-	「 秀吉の朱印船貿易の始まり 」。 この年、秀吉(1537～1598)、長崎・京都・堺の8人の豪商に、異国渡海の朱印を授けた。 その豪商とは、長崎の荒木宗太郎(?～1636)・末次平蔵(1546?～1630)・船本弥平次・糸屋隋右衛門、京都の茶屋四郎次郎清延(1545～1596)・角倉与一(素庵、了以の長男)(京都二条の角倉本家では代々、与一を称する)(1571～1632)・伏見屋、堺の伊予屋。 それまで黙認されていた私貿易を統制するものとされる。	6369
	9月18日	太閤秀吉、入京して禁裏に参内。	6370
	9月22日	秀吉、京都聚楽第において、加藤清正使者の飯田覚兵衛(直景)らの報告をうけ、会寧の加藤清正へ、保護した朝鮮王子について詳細なる注意を指示、今後の予定を通知。詳細は木下吉隆・山中長俊に通達させる。	6371
	9月23日	秀吉、京都から大坂城に帰城。 豊臣秀勝(小吉)(1569～1592)が、朝鮮の唐島(巨济島)で戦傷死したという報が届く。 豊臣秀勝正室の江(1573～1626)は文禄4年(1595)に秀吉の養女として徳川秀忠(1579～1632)に再嫁した。	6372
	9月-	秀忠、江戸に戻る。	6373
	10月1日	太閤秀吉、母・大政所の葬儀・満中陰法要(四十九日法要)を終えて、再び肥前国名護屋城に下向するため船で大坂を出陣、兵庫に宿泊。	6374
	10月10日	肥前国名護屋に在陣中の太閤豊臣秀吉、関白同秀次(1568～1595)に、尾張・三河両国など東海諸国の与力大名に命じて安宅船(大型軍船)を建造するよう命じる。	6375
	10月10日	「 遠路為音信、飛脚殊陣中祈念之守札、並下緒到来、祝著候間、全阿彌可申謹言 」。 家康、武蔵葛飾郡小淵村の不動院(埼玉県春日部市小淵)に御内書を送り謝す。不動院は、名護屋在陣の家康に見舞いとして、飛脚をもって祈念守札・下緒を送った。	6376
	10月10日	「 遠路為音信、飛脚殊陣中祈念之守札到来、祝著被思食候、猶全阿彌可申候也 」。 家康、武蔵足立郡中尾村の玉林院(さいたま市緑区中尾)に御内書を送り謝す。玉林院は、名護屋在陣の家康に見舞いとして、飛脚をもって祈念守札を送った。	6377
	10月27日	「 徳川家康・前田利家連署状 」。「 一のと の国より筑前家中へ差遣候」。家康・利家、路次御奉行中に黒印状。	6378
	10月30日	名護屋に向かう秀吉、神屋宗湛(筑前国博多の豪商)(1551～1635)の茶会に招待される。	6379
	11月1日	太閤秀吉、再び、肥前国名護屋城に到着する。	6380
	11月8日	「…… 被入御念蒙仰候事、喜悅之至 」。 家康(1543～1616)、文禄の役在陣の筑前侍従(小早川隆景)(1533～1597)に書状を送る。	6381
	11月10日	秀吉、朝鮮在陣中の加藤清正(1562～1611)へ、来春3月の渡海を予定し一揆を「撫切」にすること、兵糧・加子についての指示を命令し、来春は神に誓って必ず渡海する決意を述べる。詳細は熊谷直盛(?～1600)・垣見一直(家純)(?～1600)に伝達させる。	6382
	11月16日	京に戻れた山科言経(1543～1611)、聚楽第の関白豊臣秀次を訪問し対面する。 言経は、徳川家康同意の下、豊臣秀次に召し抱えられる。	6383
	11月18日	「 節々飛脚祝著被思召候、猶中納言殿著氣候間、万事可被入精候、謹言 」。 家康、江戸城の井伊侍従(井伊直政)(1561～1602)に黒印状を送り、節々の直政報告を喜び、中納言(秀忠)の若き間の引き回しを依頼する。	6384

天正20 (文禄1)	11月24日	本願寺第十一世顕如光佐(1543～1592)、没、享年50。 顕如の示寂にともない、教如光寿(1558～1614)、本願寺を継承する。この時、石山合戦で籠城した強硬派を側近に置き、顕如と共に鷲森に退去した穏健派は重用しなかった為、教団内に対立が起こる。	6385
	12月4日	「…… 仍渡海之儀可有延引之由申 」。 家康(1543～1616)、藤堂佐渡守(藤堂高虎)(1556～1630)に返書を送る。高虎の高麗渡海は延期となっていた。	6386
	12月6日	太閤秀吉、朝鮮渡海に目付として従軍していた三奉行(増田長盛・石田三成・大谷吉継)宛に、京幾道・陽智城の守将であった中川秀政(播磨国三木6万6千石)の頓死により、弟・中川秀成(1570～1612)へ跡目相続を認めた旨を伝達すると共に、自身来春3月に渡海するので、その間、城をしっかりと守り、軽率な行動をとらないように厳命し、下々の者にまで堅く申し聞かせよ、とする。加えて目付たちの戦況報告を了承し、来春3月に渡海して「一揆」(朝鮮側の官兵と義兵)をみな成敗して仕置を申しつけるので、兵糧を備蓄して待つように、と述べる。	6387
文禄1	12月8日	後陽成天皇即位のため、「文禄」に改元。	6388
	12月11日	「伏見の普請の事、利休に好ませ候て懇ろに申し付けたく候」。 秀吉、肥前国名護屋から在京中の京都所司代・前田玄以(1539～1602)へ、来春早々伏見指月城普請の大工を召し連れ名護屋へ下向するよう命令。伏見城の趣向は千利休好みにする旨を指示。	6389
	12月13日	「 信濃国築摩郡内参万五千七百五拾 」。 家康、秀吉家臣・石河玄蕃(石川康長)(1554～1643)に朱印状。徳川家康、石川康正(数正)(1533～1592?)の子三長(康長)をして、亡父の安曇・筑摩二郡を嗣がしむ。石川康長は、筑摩郡3万5755石、安曇郡2万2469石、都合5万8225石を知行。家康は、秀吉に命じられたのか。	6390
	12月13日	徳川家康、信濃国与力の木曾義昌(1540～1595)・小笠原秀政(1569～1615)ら諸大名に、肥前名護屋出陣を命ず 。	6391
	12月14日	信濃松本10万石の石川出雲守康正(数正)(1533～1592?)、肥前国名護屋で没し、この日、京七条河原で葬礼が行われるという(『言経卿記』)。 家督は長男の康長(1554～1643)が継いだが、遺領10万石のうち、康長は8万石、二男の康勝(?～1615)は1万5千石、三男の康次(?～?)は5千石、四男の定政(?～?)5千石をそれぞれ分割相続することとなり、豊臣秀頼に仕えた。	6392
	12月25日	「 遠路為御音信、代僧殊三浦木綿被指越祝著候 」。 家康、想持院に書状を送り、三浦木綿の陣中見舞を謝す。 神奈川県伊勢原市沼目の惣持院であろうか。	6393
	12月28日	「 上州那波郡総社式萬七千石余充行 」。家康、諏訪小太郎に判物発給。 徳川家康(1543～1616)、諏訪頼忠(1536～1606)をして、上野国那波郡総社の地を領知せしむ。諏訪頼忠、上野国総社(群馬県前橋市)に転封。	6394
	12月30日	「 当表就在陣、為音信飛脚、殊蠟燭 」。 家康、鶴岡(鶴岡八幡宮)・円覚寺に書状を送り陣中見舞を謝す。	6395
	12月30日	「 当表就在陣、為音信使僧并蠟燭送 」。 家康、建長寺に書状を送り陣中見舞を謝す。	6396
	12月30日	「…… 殊為御音信太刀一腰長光・馬 」。 家康、本願寺貴報(手紙)に返書をもって、贈物を謝す。	6397

西暦1592

文禄1	12月30日	南部信直（「信直」）(1546～1599)、「釵帶」(檜山釵帶)宛に、津軽為信（「右京」）が肥前国名護屋城に於いて秋田氏（「檜山殿」）（秋田安東実季）との和解を望み徳川家康（「家康」）に斡旋を依頼したこと、前田利家（「筑前殿」）と徳川家康（「家康」）が肥前国名護屋へ到来した際に依頼したことなどを通知。	6398
	12月－	暮れ、お江（於江与）(1573？～1626)、豊臣（羽柴）秀勝の娘・完子（九条忠栄室）(1592～1658)を、姉の淀殿（茶々）(1569～1615)のもとで産む。	6399

西暦1593

文禄2	1月1日	秀吉、能の稽古を始める。秀吉、能役者の暮松新九郎（山城国八幡山在住）が、名護屋まで新年祝賀を述べに来たので大いに喜び、正月中は能の稽古に励む。	6401
	1月2日	「当国在陣為届、遠路罷越候事、御祝著被思食候也」。 家康、相州二宮神社に礼状を記す。家康が肥前名護屋に陣中に相模二宮社の神主が、使者を遣して見舞った。家康は喜び、祈祷札を献上した川勾神社（神奈川県中郡二宮町山西）に50石を寄進したという。	6402
	1月5日	後陽成天皇（1571～1617）に譲位して隠退した第106代正親町上皇（1517～1593）、崩御。宝算77。	6403
	1月7日	「年頭之為祝儀、太刀一腰・馬一匹并鶴到来祝著之至候、」。 家康、藤堂佐渡守（藤堂高虎）(1556～1630)に書状を送り、年頭の祝儀を謝す。	6404
	1月7日	蝦夷地を支配する蠣崎慶広（1548～1616）、徳川家康に謁す。 のちの松前慶広は、1月に肥前国名護屋城で兵を率いて朝鮮出兵前の秀吉に謁見した。秀吉は「狄の千島の屋形」が遠路はるばる参陣してきたことは朝鮮征伐の成功の兆しであると喜び、従四位下・右近衛権少将に任じようとするが、慶広はこれを辞退した。慶広は代わりに蝦夷での徴税を認める朱印状を求め、秀吉はこれを認めると共に志摩守に任じた。	6405
	1月26日	「文禄の役」。 朝鮮軍を援助する明軍、7日より攻勢、この日までには平城・開城を奪回。	6406
	2月8日	「当表在陣為見廻、遠路所使僧并毘」。 家康、妙法坊に書状を送り、在陣見舞を謝す。家康は、鞍馬寺参詣者の宿坊妙法坊の檀那であった。	6407
	2月12日	徳川家康52歳（1543～1616）、領国内の武将に命じて大船建造のため、鉄板を名護屋へ輸送させる。	6408
	2月21日	「当表在陣為見廻預使僧候、随而妙」。 家康、清見寺（静岡県清水区興津清見寺町）に書状を送り、在陣見舞を謝す。	6409
	2月24日	「当表在陣為届史僧、殊兩種給候祝」。 家康、淨国寺（埼玉県さいたま市岩槻区加倉）に書状を送り、在陣見舞を謝す。	6410
	2月24日	是より先、上杉家臣須田満親（1526～1598）、徳川家康に歳暮を賀す、是日、家康、之に答謝す。	6411
	3月10日	「当表在陣為届使僧、殊褶式端到来」。 家康、妙本寺（神奈川県鎌倉市大町）・本門寺（東京都大田区池上）に書状を送り、在陣見舞を謝す。妙本寺は、池上本門寺貫主が兼帯した。	6412
	3月10日	「当表在陣為届銀子壹枚到来、祝著」。 家康、香取神主に書状を送り、在陣見舞を謝す。香取神宮は、千葉県香取市香取にある神社。	6413

西暦1593

文禄2	3月28日	「当表在陣為届使僧、殊相原并扇子」。 家康、龍園寺（埼玉県入間市新久）に書状を送り、在陣見舞を謝す。	6414
	4月18日	「文禄の役」。小西行長、明の使者の和議を容れる。	6415
	4月21日	「……無相違其地御渡海之由、目出」。 家康、無事渡海を知らせた羽柴伊達侍従（伊達政宗）(1567～1636)に書状を送る。	6416
	4月21日	「……仍其許へ無何事渡海之由目出」。 家康、無事渡海を知らせた、伊達政宗側近の原田左馬助宗時・片倉小十郎景綱・白石若狭守宗実宛に書状を送る。	6417
	4月23日	「当表在陣為届、扇子到来、被思召」。 家康、武蔵六所に書状を送り、扇子到来を謝す。 大國魂神社（東京都府中市宮町）は「武蔵総社六所宮」として、武将、有力者の崇敬を長く受けてきた。特に徳川家康と関わりが深く、櫻の苗木、陣羽織、獅子頭が奉納されている。平成22年（2010）には神社の西側から家康が鷹狩りを行った際の御殿跡が発掘された。遺跡からは「葵紋」の入った鬼瓦の一部が出土している。	6418
	4月25日	秀吉、肥前国名護屋津（佐賀県唐津市鎮西町名護屋）に到着。	6419
	4月28日	「文禄の役」。日本軍、明の偽装使節を伴い漢城退去。	6420
	4月30日	「……仍うるさん表之御勤、城共五」。 家康、朝鮮在陣の大崎侍従（伊達政宗）に労り状を記す。	6421
	5月15日	石田三成ら三奉行と小西行長ら、明使節の謝用梓・徐一貫と共に、肥前名護屋に到着。明の講和使節、名護屋に着くと、家康・前田利家の邸宅がその宿舍とされた。しかしこの明使節は宋応昌が幕下の策士を明皇帝から任命されていないのに「明使節」を詐称していた。	6422
	5月20日	「対大明国勅使、面々召仕候者、悪口申之由、被及聞召、御触之通、得其意奉存候、急度可申付候、向後若左様之者御座候」。 羽柴江戸大納言徳川家康・大和中納言羽柴秀保・丹波中納言羽柴秀俊・岐阜中納言織田秀信・結城少将秀康ら20名連署誓紙を大明国勅使に与える。あくまでも本物の使節と考えた秀吉は、彼らを歓待したという。そしてこの日、名護屋に陣の大名・武将ら120人に対して、使節に無礼を働くことを禁じる誓約をさせた。羽柴秀俊は、叔父である羽柴秀吉の養子になり、幼少より高台院に育てられた。元服して木下秀俊、のちに羽柴秀俊（豊臣秀俊）と名乗った。文禄1年（1592）には従三位・権中納言兼左衛門督に叙任し、「丹波中納言」と呼ばれた。のちの小早川秀秋（1582～1602）である。 羽柴秀保（1579～1595）は、豊臣秀吉の姉・瑞龍院日秀（とも）の子で、豊臣秀長の婚養子となる。大和国の国主で大和太納言と呼ばれた秀長を継ぎ、官位が中納言であったことから、大和中納言の通称と呼ばれた。	6423
	5月22日	秀吉、肥前国名護屋からおね（北政所）宛自筆書状で、明の使節が謝罪のために名護屋に来て講和のための条件を提示したこと、一方で秀吉が朝鮮半島に日本の城の建設を命じていること、追伸の中で秀吉が風邪をひいていると述べていること、二丸殿（淀殿）の懐妊についておねへ配慮していることなどを記す。	6424
	5月23日	「文禄の役」。秀吉、明使節に謁見、饗応する。	6425
	5月26日	武蔵国で五千石を賜った、家康家臣柴田康忠（1538～1593）、この日没。56歳。 一向一揆の蜂起での逸話が残る、弓矢の名手であったという。	6426

文禄2	6月3日	五井松平家5代当主松平景忠（1541～1593）、没。享年53。6代は、子の伊昌（1560～1601）が継いだ。	6427
	6月16日	「……長々御在陣御苦勞共難申尽」。家康、朝鮮在陣の藤堂佐渡守（藤堂高虎）（1556～1630）に勞り状を記す。	6428
	6月16日	「……炎天之時分苦勞共候、頓而被」。家康、朝鮮在陣の、伊達政宗の伝役・片倉小十郎景綱（1557～1615）に勞り状を記す。	6429
	6月24日	秀吉、肥前国名護屋陣中において仮装による軍勞慰問を行う。「瓜畑遊び」と呼ばれる仮装園遊会。 太閤秀吉（1537～1598）、諸大名を召し連れ瓜畑で、家康（1543～1616）をはじめ諸將と振売商人の扮装をし、軍勞を慰める。23日とも。秀吉は瓜売り、家康はザル売り、有馬則頼（1533～1602）は「有馬池坊」の宿主人を、蒲生氏郷（1556～1595）は茶売り、織田有楽斎（1547～1622）は旅の老僧に扮した。織田有益は、織田信雄改易後は、秀吉の御伽衆として摂津国嶋下郡味舌（大坂府摂津市）2千石を領した。また、剃髪して「有楽斎」と称した。	6430
	6月28日	「文禄の役」。太閤秀吉、石田三成・増田長盛・大谷吉継・小西行長を通じて大明国と日本国の和平の7ヶ条の「条々」を提出する。 明皇帝の賢女を日本の后妃に迎えること、勘合貿易の復活、明・日本両国の武官による誓紙交換、明に八道を割分し四道ならびに漠城を朝鮮国王に返還すること、朝鮮王子・大臣を人質として渡海させること、捕虜とした朝鮮二王子の返還、朝鮮国大臣の誓紙要求などを、明使節へ通達。翌日、明使節は帰国に向けて発つ。	6431
	7月12日	秀吉、一柳直盛（1564～1636）に朱印状を送り、堀尾吉晴（1543～1611）と協力して建造の大安宅船の出来を賞す。	6432
	7月12日	「乍幸便令啓候、仍御煩之由承、無御心元存候、一鴈軒 為 御意渡海之事候条無油断御養生專一候、恐々謹言」。 家康、朝鮮在陣中の蜂須賀阿波守（蜂須賀家政）（1558～1639）に病氣見舞状を送り、秀吉の密命を帯びた医師、一鴈軒が渡海するので注意するよう伝え、養生專一を告げる。 家康と蜂須賀阿波守の結びつきが強いことがよく分かる。	6433
	7月22日	「文禄の役」。小西行長ら朝鮮二王子を送還する。	6434
	7月23日	「徳川家康・前田利家連署黒印状」。 「坂井文助人数廿式人、加子四人、」。家康・利家、路次御奉行に黒印状。、尾張の土木関係の奉行、坂井文助利貞とされる。	6435
	7月26日	「就高麗退治帰朝、諸嶋乱入責取事」。 家康、小笠原民部少輔に書状を送る。細川氏家臣の小笠原秀清（1547～1600）であろうか。	6436
	8月3日	「秀頼誕生」。 淀殿（秀吉側室浅井茶々）（1569～1615）、大坂城二之丸において男子（拾丸、後の秀頼）（1593～1615）を出産。秀吉57歳の時の子で、子供の健康な成長を願う当時の祈願として、いったん捨てた形にして、家臣の松浦重政が拾い上げたという。	6437
	8月6日	徳川家臣・保科正俊（1511～1593）、没。往年は武田氏の信濃先方衆（120騎持）の一人として活躍し、下伊那攻めや北信濃攻めに従軍。特に槍に優れた使い手であったため、「戦国の三弾正」に数えられ、高坂昌信（春日虎綱）（1527～1578）の「逃げ弾正」、真田幸綱（1513～1574）の「攻め弾正」に対して「槍弾正」と称されたという。	6438
	8月15日	拾丸（後の秀頼）誕生を喜ぶ秀吉、肥前国名護屋を発す。 秀吉は肥前名護屋の陣中より正室北政所に書状を送り、「拾い」と名づけるよう命じたという。	6439

文禄2	8月15日	秀頼誕生を喜ぶ秀吉が肥前国名護屋を発したこの日、前田利家・徳川家康などの有力大名、名護屋在陣の東国大名、朝鮮半島に渡海していた伊達政宗・上杉景勝らも次々に領地に帰る。	6440
	8月18日	佐竹義宣（1570～1633）、肥前国名護屋を発し常陸水戸に向かう。	6441
	8月25日	秀吉、摂津国大坂城に帰城。奉行石田三成も従う。	6442
	8月29日	家康（1543～1616）、肥前国名護屋から大坂に着く。	6443
	9月4日	太閤秀吉（1568～1595）、伏見において関白豊臣秀次（1568～1595）を引見し種々戒告を与える。秀次は、拾丸（後の秀頼）（1593～1615）誕生により自分の立場がどうなるかわからない」という不安を持ちだしたか。	6444
	9月6日	「江戸亜相（家康）へ罷向了、少間帰宅了、又罷向、夕食有之、種々雑談、入魂之事也、」。（『言経卿記』）。家康・山科言経が雑談。	6445
	9月7日	徳川家康、京の前田利家邸に御成。	6446
	9月8日	「江戸亜相へ申下刻ニ罷向、寅下刻マテ種々雑談了、柳原（淳光）被行了、酒有之、」。（『言経卿記』）。家康、山科言経（1543～1611）・柳原淳光（1541～1597）と雑談、酒を交わす。	6447
	9月10日	「江戸亜相（家康）へ晩ニ罷向了、酒有之、目カ子一ツ給了、水無瀬黄門（兼成）同被行之了、」。（『言経卿記』）。山科言経（1543～1611）、家康から眼鏡を給う。	6448
	9月14日	「江戸亜相へ阿茶丸（言経の息子）同道了、扇子五本持罷向了、」。（『言経卿記』）。扇子五本を家康に持参した言経の息子は、山科言緒（1577～1620）か。	6449
	9月15日	「江戸亜相大坂へ下向之間、イトマコイニ罷向了、石川日向守被申事ハ、三人相添之由有之、然者十人扶持方也云々、亜相ヨリ被仰云々、祝著之由申了、」。（『言経卿記』）。 徳川家康、大坂へ下向。 石川家成（1534～1609）曰く、家康は、山科言経は三人を養う必要があるから、十人扶持を与えよう、と言ったそうだ。言経は喜んだ。	6450
	9月17日	秀忠、この日上洛。	6451
	9月24日	方広寺大仏殿の棟上式がある。	6452
	9月27日	秀吉、おね（北政所）を同伴し摂津国有馬へ湯治。	6453
	閏9月7日	秀吉、有馬より大坂城に帰城。	6454
	閏9月12日	徳川家康、京の前田利長邸に御成。	6455
	閏9月13日	家康、自らの伏見邸に縄張りに出向く。	6456
	閏9月16日	秀吉（1537～1598）、本願寺教如光寿（1558～1614）を隠居させ本願寺准如（1577～1630）を本願寺家督と決定。秀吉、教如の先行を責め、門跡を弟准如光昭に譲らせる。本願寺の東西分派（後、教如は徳川家康から寺地を寄進され、別に東本願寺を創立）の契機となる。	6457
	閏9月16日	徳川家康、京の有馬則頼邸に御成。	6458
	閏9月17日	信濃国飯田城主毛利秀頼（1541～1593）、卒す、尋いで、秀頼の婿高極高知、秀頼の遺領を領す。遺領10万石の内の1万石だけが長男の毛利秀秋（?～1615）に与えられ、大部分は毛利秀頼の娘婿の京極高知（淀殿の従弟にあたる）（1572～1622）が継承した。	6459
	閏9月20日	太閤秀吉、大坂城を明渡し、竣工した伏見新第（指月山城）（京都市伏見区桃山町泰長老）へ正式に移徙。 諸將、伏見近辺に第館を設け始める。	6460
	閏9月21日	秀吉、諸侯を招いて伏見にて茶会。	6461

文禄2	閏9月22日	家康52歳（1543～1616）、前田利家、会津少将、有楽斎、徳善院、有馬法印、秀吉の伏見城茶会に招かれる。	6462
	閏9月28日	「 梶陣為見舞 遠路之所入念 夫僧為悦候 委細全阿弥 可申候謹言 」。 家康、肥前国名護屋に見舞いの使僧をおくってきた、東漸寺（千葉県松戸市小金）に書状を記し謝す。家康が、使者を遣わして第8世靈譽円応上人に渡したものとされている。	6463
	10月1日	「木下半介（吉隆）方より申越、御ひろい様と姫君様御ひとつになさせられ候はん由、被仰出由関白様被成還御次第、其通羽筑州（前田利家）夫婦ヲ以可被仰出由也」（『駒井日記』）。 「秀吉は秀次、秀頼へという政権継承を模索した」 。 秀吉、拾丸（後の秀頼）（1593～1615）と関白秀次の女兒の婚約を決める。秀次の娘は、夭折した八百姫もしくはのちの露月院（1587～1595）とされる。	6464
	10月2日	太閤秀吉、京の徳川家康邸・浅野長吉（長政）邸に御成。	6465
	10月3日	秀吉、諸大名を供奉させ禁裏に参内。	6466
	10月5日	太閤秀吉（1537～1598）、禁裏に参内し、この日より3日間、後陽成天皇（1571～1617）の前で能の会を催し、秀吉、細川忠興（1563～1646）らと、舞台の橋掛かりを練り歩く。 家康も「千手」を演能する 。 「橋掛かり」とは、揚幕から本舞台へとつながる長い廊下部分のこと。	6467
	10月6日	家康に、5日に禁裏で行われた能で「千手」を舞ったことにつき鳥目5貫が禁裏より下付される。	6468
	10月10日	江戸亜相へ罷向、碁見物了、夕食有之、先刻一条（内基）殿渡御了、及乱酒、同黄門（秀忠）へ御出、酒有之、。（『言経卿記』）。 山科言経（1543～1611）は家康のところで碁見物、夕食、そこに一条内基（1548～1611）が来て乱酒、続いて秀忠のところで酒を交わしたようだ。	6469
	10月11日	関白豊臣秀次、尾張国清州城から上洛する。	6470
	10月13日	徳川家康、京の富田一白邸に御成。	6471
	10月14日	家康、江戸に向けて京を発つ。	6472
	10月16日	関白秀次、太閤秀吉、本願寺影堂留守職について裁断を下す。	6473
	10月19日	秀吉、近江国大津へ下向。	6474
	10月26日	徳川家康、1年7ヶ月ぶりに江戸に帰城。	6475
	10月27日	関白秀次、伏見で太閤秀吉に謁見。	6476
	10月29日	武蔵国深谷城（埼玉県深谷市本住町）の松平康直（1569～1593）、父長沢松平康忠（1546～1618）に先立って没。享年25。母は徳川家康の異母妹・矢田姫（1547～1603）。娘に蓮姫（徳川家康養女・有馬豊氏室）（1582～1652）がいる。隠居していた康忠は、翌年、家康七男の松千代（1594～1599）を康直の養子とし、深谷1万石を相続をさせた。	6477
	10月30日	家康、諸士を江戸城へ集め、饗応する。	6478
	11月9日	「 分国中山金・河金・芝間事 右本 」。 家康、田辺土佐に朱印状。甲斐黒川金山を採掘する金山衆の田辺土佐守。	6479
	11月9日	「 定 一分国中、山金・川金・芝間 」。 家康、黒河衆・阿部衆、大野弥兵衛・祢津新左衛門に朱印状。	6480
	11月11日	秀吉、大坂城に在城。	6481
	11月12日	「……其元御隙明御帰朝之由目出」。 家康、藤堂佐渡守（藤堂高虎）（1556～1630）に書状を送り、帰朝を祝す。	6482

文禄2	11月15日	「 合六まい七両貳分二朱 右分請取 」。家康、小新に請取状。 ^{うけとりじょう}	6483
	11月16日	「…… 至其地御上之由候、隨而高麗 」。 家康、小寺如水（黒田如水）（1546～1604）に書状を送る。慶長3年（1598）ともいう。	6484
	11月18日	豊臣秀吉、尾張国へ鷹狩りに下向するため山城国伏見に赴く。	6485
	11月19日	太閤秀吉、関白豊臣秀次を伏見において引見、尾張国で放鷹のため下向。	6486
	11月19日	「その方事、来春豊後へ遣わされ候。ついては家来ことごとく召し連れまかり越すべく候。自然逐電の族、これあり候えば、追って先々成敗を加うべき也」。 秀吉、播磨国三木城6万6千石から豊後の岡7万4千石に移封の中川秀成（1570～1612）に書状を送る。中川家中は、移封に抵抗する者らがいた。	6487
	11月20日	「 甲斐国之事、令扶助之訖、全可領知候、但此内壹万石、為御蔵入、令執沙汰、可運上候、并羽柴大崎侍従、」。 秀吉、浅野彈正少弼（長政）・浅野左京大夫（幸長）に領知判物発給。 朝鮮出兵でも功績があった浅野長吉（後の長政）（1547～1611）、若狭小浜8万石より、加藤光泰の死後に収公されていた甲斐国府中21万5千石への転封を命じられる。また、東国大名の取次役を命じられる。	6488
	11月20日	蒲生氏郷、肥前名護屋から会津に還る。	6489
	11月24日	秀吉、尾張国清州城（愛知県清須市一場）に到着し、3日間逗留。	6490
	11月29日	秀吉、島津義弘と鍋島直茂へ、捕獲した朝鮮人中の「細工仕者」・縫官・手先の器用な女性の進上を命令。	6491
	12月8日	豊臣秀吉、尾張国熱田から桑名を経て伊勢国亀山（三重県亀山市本丸町）に到着。	6492
	12月11日	秀吉、尾張より伏見に帰還。	6493
	12月11日	豊臣秀吉、上野国沼田城（群馬県沼田市西倉内町（沼田公園））主真田信幸の伏見城普請役を免除し、領内の開発を致さしむ。	6494
	12月14日	秀吉、伏見より淀川を下り大坂城に帰城。	6495
	12月16日	「 一分国中山金・川金・芝間共尔可 」。 家康、市川市左衛門（市川真久）に、朱印状をもって、山金採掘その他に関する徳川家免許状を与える。 信濃の国と甲斐国の要所であった南牧の地（群馬県甘楽郡南牧村）をおさめる市川家を家臣にしたかった徳川家康は、父の真久を江戸城に呼んだが、父は、代わりに22歳の五郎兵衛を江戸城に向かわせた。家康の前で五郎兵衛は、「志すでに武に非ず、殖産興業にあり」と答えたため、家康の領土で土地の開発を認めるという朱印状を与えられた。その後南牧の地で、砥石の採掘で私財を貯め、その私財を投じて用水開拓にいそしんだという。	6496
	12月17日	豊臣秀吉、家臣長束正家・増田長盛・石田三成・前田玄以、真田昌幸に、京都伏見城の普請役を命じる。	6497
一		「 御前講議のはじめ 」。 この年、徳川家康（1542～1616）は肥前名護屋に赴き、小早川秀秋と家康に接した儒学者藤原惺窩33歳（1561～1619）を江戸に招いて「 貞 観政要 」（政治のあり方を説き示した中国古典）を受講、治世を学ぶという。 徳川時代の朱子学の開祖といわれる藤原惺窩が、朱子学を絶対視しなかったことが、徳川時代の思想全体の異端に対する寛容の態度を生み出したともいう。	6498

本書(下巻・前編)は、天正20年(1592)12月の「文禄」に改元頃からはじまり、「秀吉の死」を経て、慶長5年(1600)「関ヶ原の戦い」、そしてその勝者家康が「江戸幕府を開く」までの、家康の軌跡を記載しました。“文書等並べて……”と銘打ち、調査、編集しはじめたのですが、想定より家康・秀忠及び家臣らの文書が多く、編集の進捗状況・頁数・定価等鑑み、下巻は前編・後編の2巻に分ける事とし、全3巻から全4巻とすることといたしました。

当初の予定と変更することになり、お問い合わせいただきました方々、上巻・中巻をご購入いただきました方々、ご協力いただきました方々に深くお詫び申し上げます。

家康等の文書はもっとはるかに多い物と思われそうですが、文書等は写しも多く、写し間違いや、年比定等、通説に疑問を呈する物も多いこともありますことなども、ご了承下さいませ。

本書で激動の徳川家康波乱の時代を垣間見て頂き、「大河ドラマ」視聴等を楽しんでいただきたら幸いです。

編集にあたり、主に、「上巻・中巻」掲載の主要参考図書や他の当社「戦国年表帖」参考図書、国立国会図書館デジタルコレクション、東京大学デジタルコレクション、国の公式WEB、各自治体・各大学・各団体WEB等、大いに活用させていただきました。しかし、資料による違い、異説、物語などあらゆる事項があり、すべては、弊社の編集責で掲載しております。

最後になりましたが、写真提供などしていただいた愛知県・静岡県の自治体及び各機関様、また、ご協力いただきました取材先様、スタッフの皆さまに、厚く御礼申し上げます。

写真協力(上巻・中巻)

(一社)豊橋観光コンベンション協会 豊明市観光協会 岡崎市 田原市博物館
安城市教育委員会 蒲郡市観光協会 新城市観光協会 長久手市 静岡県観光協会
浜松・浜名湖ツーリズムビューロー 掛川市 藤枝市郷土博物館 清水町教育委員会
鳥越一朗 (順不同)

文書等並べて辿る、家康、松平一族・家臣 徳川家康75年の生涯年表帖 下巻・前編 第3巻(全4巻)

「秀吉の死」、慎重居士家康が策動。好士の筆まめ家康が大胆に天下を獲った！

第1版第1刷

発行日 2023年8月10日

デザイン 岩崎宏

編集・制作補助 ユニプラン編集部 橋本豪

発行人 橋本良郎

発行所 株式会社ユニプラン <http://www.uni-plan.co.jp>
(E-mail) info@uni-plan.co.jp

〒601-8213 京都市南区久世中久世町1丁目76

TEL(075)934-0003 FAX(075)934-9990

振替口座/01030-3-23387

印刷所 株式会社ティ・プラス

定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-89704-581-8 C0021